

楽しく美しい まちづくり通信…④5

裸参りが 年の始まり

五穀豊穡、無病息災などそれぞれの思いを祈願するために行われていました。当時は、市内をはじめ、周辺の町村や県外から二百人も参拝者があつたといひます。しかし、昭和四十年代に入つて交通事情の悪化により、やむを得ず中断したそうです。その後十八年間裸参りは行われておりませんでした。

田口正晴さんの父臣悦さん(食堂経営)は、信仰が厚く、裸参りを是非、復活したいと稲荷神社にお願いし、十一年前から行われるようになりました。しかし、その間の急激な社会情勢の変化により参加する人は、今では七、八人と少なくなりました。

一月二日(昔は旧暦の十二月二日)、例年この時期は、雪はまだ少ないものの、季節的に寒さは一番厳しいころです。この日、市内の呑香稲荷神社(宮司小保内道彦さん)で裸参りが行われます。

この裸参りの始まりは明らかではありませんが、第二次世界大戦中は、戦勝祈願、武運長久、

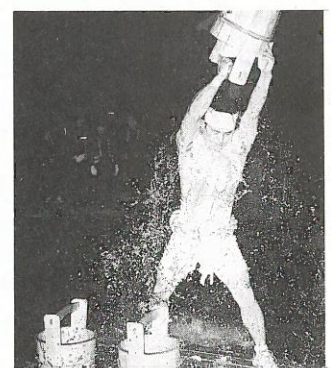
した。

正晴さんは、幼い頃から、裸参りのことを祖父やお父さんから聞かされていたこともあり、自ら裸参りに参加しようと思つたといひます。

裸参りは二日の夕方、田口さん宅に集まり、男は禪やパッチ、女は白衣一枚を身にまとい、宮司さんのおはらいを受けてから、先ぶり太鼓を先頭に夜六時長嶺を出発します。わらじを履き、腰にしめ縄をまとい、御幣を持ち、鐘を鳴らしながら、身を切るような寒さのなか、呑香稲荷神社まで約二キロ目抜き通りをゆつくり歩きます。

正晴さんは、「寒ければ寒いほど気合が入る、暖つたかいは雪が溶けて足元がぬかかって歩きにくい・・歩いていて一番きついのは、路地から吹きつける風。岩谷橋のあたりは特にしんどいよ。それにもまして対向車が運んでくる風は特別だよ」といひます。

岩谷橋を過ぎると全身が寒さのため風の痛みさえ感じなくなり、くわえ紙も凍り、痛みを感じていた手足の感覚も無くなる



水ごりをする正晴さん

そうです。それでも稲荷神社の大きな鳥居が見えると、一層身が引き締まるのを感じるといひます。出発してから約五十分、六十一段の石段を一步一步踏み締めるように登り切ると、大勢の参拝客が迎えてくれます。

境内で水ごりを済ませ、本殿において家内安全、無病息災、五穀豊穡、商売繁盛などそれぞれの思いを祈願します。

正晴さんは、復活以来今年で十一年間、子供二人と休まず続けています。「数年前、風邪引いて三十八度位の熱があつて、今年は参加できないなあと思つた。でも、子供達が御参りするのでも、私も参加しました。御参りをしたら治りましたよ」また、「この裸参りが私にとってその年の始まりでもあるんですよ。これからもできるだけ永く家族で続けたい。そして、もつとたくさん参加してくれればいいですね」と話してくれました。



11年間連続1月2日に裸参りに参加する
たぐちまさ はる
田口正晴さん (40歳)
(福岡字長嶺)

- 11日(土) 鏡開き
- 12日(日)
- 13日(月)
- 14日(火) 3歳児健康診査
(市保健センター)
- 15日(水) 二戸市成人式(市民文化会館)、小正月
- 16日(木)
- 17日(金) 市民生活相談(市役所市民相談室)、防災とボランティアの日
- 18日(土)
- 19日(日)
- 20日(月) 大寒
- 21日(火) 4カ月児健康診査
(市保健センター)
- 22日(水) 市長と語るうり日
(市長室)
- 23日(木)
- 24日(金)
- 25日(土)
- 26日(日) 文化財防火デー
- 27日(月)
- 28日(火) 一歳六カ月児健康診査(市保健センター)
- 29日(水)

こまみ



12月11日～1月10日